

教室(診療科)紹介 (90)

情報発信できる泌尿器科をめざして

泌尿器科学講座 (大橋)

教授：関戸哲利

講師 (医局長)：黒田加奈美

東邦大学医療センター大橋病院泌尿器科は、1964年の大橋病院開院とともに開設され、初代 松島教授、第2代 三浦教授のもと、地域の基幹施設として大きな役割を果たして来た。2012年1月から関戸が泌尿器科の第3代教授として大橋病院泌尿器科を担当させていただいており、現在、黒田講師、竹内助教、澤田助教に加え後期研修医の金野先生を合わせた5名という少数精鋭で診療・教育・研究に当たっている。

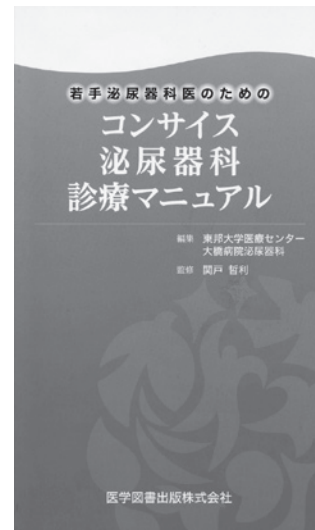
診療

関戸の大橋病院着任後、排尿機能外来の開設、尿流動態検査や前立腺肥大症に対する経尿道的レーザー前立腺核出術の導入などによって下部尿路機能障害診療の充実を図っている。また、泌尿器腫瘍の分野では、腎・副腎腫瘍に対する腹腔鏡手術が軌道に乗りつつあり、現在、竹内、澤田の両助教が認定医取得をめざした手術の指導を受けている。大橋病院が従来から力を入れている尿路結石症の分野においては、経尿道的腎尿管結石レーザー碎石術を積極的に実施するとともに経皮的腎結石碎石術も導入している。現在、経尿道的手術は生理食塩水を灌流液として用いる安全な手術に全面的に移行し、開放手術においても最新の止血器具を駆使して出血量の少ない手術を実施するなど、大橋病院の基本理念である「優しい心、親切な心のこもった医療の実践」をめざして診療に当たっている。

安全かつレベルの高い診療のためには日々の地道な取り組みも重要と考えており、朝晩の病棟回診の他、手術症例や病理報告を含めた症例カンファランス、教授回診を兼ねた入院症例カンファランス、放射線科や病理部との合同カンファランス、手術手技検討会などを開催してスタッフお



前列左から：永本晃子先生（初期研修医）、金野 紅先生（後期研修医）、黒田加奈美講師
後列左から：澤田喜友助教、関戸哲利教授、竹内康晴助教



2013年10月発刊、大橋病院泌尿器科で編集した。

よび科全体の診療レベル向上をめざしている。

教育

学生教育については、M4の系統講義とM5の臨床実習を中心に関与し、泌尿器腫瘍と下部尿路機能障害を中心とした講義、泌尿器科の処置や手術見学のほかドライボックスを用いた腹腔鏡手術手技の体験実習と導尿シミュレーターを用いた導尿実習を行っている。今後は、クリニカルクラークシップ型実習への対応能力を向上させたい。

研修医教育については、2013年10月に大橋病院泌尿器科編集の「若手泌尿器科医のためのコンサイス泌尿器科診療マニュアル」(医学図書出版株式会社)を発刊した。当院

はもとより本邦泌尿器科の初期・後期研修の指針として役立つものと期待している。せっかくの機会なので、東邦大学のアピールになるような美しい装丁をめざし、経営企画部のご協力を得て表紙に東邦大学のブランドマークを使用させて頂いた。

泌尿器科診療の多様化（例：ロボット支援手術など）に伴い、東邦大学医療センターで後期研修を行う利点を最大限に発揮するためには、大森病院・佐倉病院との連携体制の構築が今後、必要になると考えている。

研 究

低活動膀胱に関する研究の他、神経因性膀胱を始めとする下部尿路機能障害あるいは泌尿器腫瘍に関する臨床研究を行っている。マンパワーが必ずしも充足しているとは言えない現状では、どうしても診療と教育にけるエフォー

ト率が大きくならざるを得ない。しかし、大学病院としての情報発信、それを通じてのモチベーション涵養・維持は重要と考え、積極的な学会発表を推進している。

おわりに

日々の診療、教育、研究でかなり多忙な泌尿器科であるが、納涼会や忘年会、医局旅行、学会時の食事会等で息抜きと科内の親睦を図っている。現在の病院はさすがに施設の古さが否めず外来・入院診療に支障を来す場面が少なくない。新病院開院を期待して科として団結し高度な泌尿器科診療が行えるように日々努力するとともに、大橋病院泌尿器科から世界へ向けての情報発信を行ってゆきたいと考えている。

(教授：関戸哲利)